母性看護実習における教育効果
―帝王切開分娩見学の意義を検討して―

島田文恵[1)]，長谷川ともみ[2)]，北　悠理[1)]，二川香里[2)]，
西村佳余子[2)]，永山くに子[2)]

1）前富山大学医学部看護学科
2）富山大学医学部看護学科

要　旨

帝王切開分娩が増加傾向にある現在，母性看護実習においても帝王切開分娩見学の意義を検討することは重要である．前回の報告では，帝王切開分娩を見学した学生の実習後の母性意識に変化はみられなかったが，本研究では，新たな試みとして，見学希望者全員が見学する方法から受持ち学生が見学をすることとし，その教育効果を明らかにすることを目的とした．

研究対象は，本学において2001年から2004年まで母性看護実習を受けた222名中調査協力が得られた167名の看護学生であった．母性意識を測定する尺度として母性理念質問紙を用い，母性看護実習前後に質問紙調査を行った．統計解析として，体験項目による母性意識の変化について，多重ロジスティック回帰分析を行った．有意水準は5%とした．倫理的な配慮として，研究への協力は自由であり，成績には影響しないことを対象者に伝えた．

その結果，母性看護実習前後で母性意識は有意に上昇した．帝王切開分娩について見学希望者全員が見学する方法から受持ち学生のみの見学にしたところ，母性理念質問紙において否定項目の低得点群（母性意識を否定しない群）においては，母性意識が維持・上昇した．

以上より，帝王切開分娩の見学実習においては，産婦受持ち学生のみの見学とすることが母性意識の維持・高揚の点では効果があると示唆された．

キーワード

母性看護，教育効果，帝王切開分娩，母性意識

序

我が国における帝王切開分娩数は年々増加しており，母子保健の主なる統計[1)]によると，1984年の帝王切開が7.3%であったのに比し，2005年は17.5%と20年余りで10%以上の増加となっている．茆原らが[2)]，増加の原因をWilliams Obstetrics 21 th ed[3)]で挙げられている要因を基に検討したところ「高年齢出産の増加」，「1970年代からの胎児モニタリング機器の出現」，「骨盤位の帝王切開率の上昇」，「出産回数の減少」さらに「社会経済的要因」が，我が国の帝王切開率上昇の要因となりうると述べている．このように多要因のもと我が国における帝王切開分娩が出産方法として増加している現在，母性看護実習においても帝王切開分娩率の増加の与える影響を考慮する必要があると考える．

母性看護実習における帝王切開分娩見学に関す

る先行研究は数少ない。

本学では2001年に1997年から2000年にかけての母性看護実習における実習効果を母性意識の高揚の観点から報告を行った[4]．前回調査時は，見学を希望する看護学生による帝王切開分娩見学実習としていた．この場合，学生の実習前後における母性意識の上昇は認めなかった．これらの結果をふまえ，実習方法を変更し，帝王切開の分娩見学実習を受持ち看護学生のみに行うこととした．すなわち，偶発的な帝王切開分娩見学実習を差し控えた実習展開を行った．

本学の母性看護実習では，一般目標を「周産期における母子の身体的・精神的・社会的特徴を理解し，各々の日常生活が健康的に，かつ母親として適応できるよう看護上の課題を判断し，セルフケアに向けて総合的な母性看護活動を体験する．それらをとおして学習を内面化し，自己の生命観・母性観を確立する」としている[5]．

また一般目標に基づき，分娩期における個別行動目標を「分娩期における産婦の身体的精神的苦痛に共感することができ，安楽への援助ができる」「出生直後の母と子のかかわりを観察できる」として実習を展開している[5]．そのため対象妊産褥婦や新生児の身体的変化を習得することにとどまらず，対象者への共感的理解に主眼を置いている．これらの考えに基づき実習方法を受持ち制とすることは，妊産褥婦にじっくり関わり，関係性を築くことを助け，学生の対象者への共感的理解を深めると考えている．

帝王切開分娩の見学実習においても同様であり，帝王切開分娩となる医学的適応や手術前後の身体的変化だけではなく，母子の愛着形成や産婦の心理的変化へも目を向け，産婦への共感的理解を図ることは重要である．

そこで母性看護実習前後での学生の母性意識を調査し，また実習の教育効果を把握し，今後の学生指導に役立てる目的で本研究を行った．その結果，実習方法を変更後母性意識の高揚に帝王切開分娩見学が影響を与えるようになったという結果が得られたのでここに報告する．

用語の定義

母性意識：本研究では，母性意識を花沢の概念に基づき，「女性が母親になる，あるいは母親であることの自覚と，その自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観との両者を包括する概念」[6]とした．

実習体験項目：本研究における実習体験項目とは，本学母性看護実習における教育目標に則り実習中に学生に体験の機会を積極的に提供している，正常分娩見学，帝王切開分娩見学，NICU見学（受持ち褥婦やその家族と同伴），乳房マッサージ，授乳介助，瓶哺乳の6項目とする．なお，バイタルサイン測定，沐浴およびオムツ交換は，ほとんどの学生が体験している項目のため今回の調査からは除外した．

帝王切開産婦受持ち：産婦から帝王切開分娩見学の承諾が得られ，少なくとも前日から関わり，分娩後も実習終了まで継続して援助する実習体制．

研究方法

1．調査対象

調査期間内に母性看護実習を行った本学4年次女子学生222名を対象とした．

2．調査期間

2001年4月～2004年10月

3．方法

帝王切開分娩見学の方法として，2000年までは受持ち妊産婦が帝王切開分娩となった場合以外にも学生の見学希望があれば，産婦の学生見学の了承を得た上で対象産婦との関わりを開始し，帝王切開分娩見学を行っていた．

2001年からの実習方法変更後は，受持ち妊産婦が帝王切開分娩を予定している場合および受持ちしていた妊産婦が緊急帝王切開による分娩が決定した場合に帝王切開分娩を見学することとした．学生は見学のみならず妊娠後期から受持つことで，帝王切開分娩までの術前の準備や術後のケア，母子対面，育児の場面に関わる事ができた．

「母性意識」の測定スケールとして「母性理念質問紙」[6]を用いた．母性看護実習前後に，自記式・留め置き回収法にて調査を行った．本学で

は，1997年以降継続して「母性理念質問紙」[6]を用いた調査を行っている．

「母性理念質問紙」[6]の質問項目は27項目で，母親役割を肯定する項目18項目（以下肯定項目とする）と母親役割を否定する項目９項目（以下否定項目とする）からなっている．肯定項目と否定項目をそれぞれに分析対象としている．採点は各項目について「非常にそう思う」を+2点から，「非常にちがう」を−2点の５段階評定とした．肯定項目，否定項目別に得点を集計し，実習前後の得点変化をｔ検定を用いて分析した．

実習中に学生が体験した実習項目は，実習体験項目チェックリストより抽出した．

また実習後に母性意識得点の上昇や下降にどのような実習体験内容が影響を与えるのかを知るために，実習中に学生が体験する項目を用いて多重ロジスティック回帰分析を行った．まず実習前の元々の母性意識の違いを考慮し，肯定・否定項目別に実習前の得点が平均点以上の者（高得点群）と平均点以下の者（低得点群）の４群に分けた．その後に実習後の変化を検討するにあたり，４群いずれにおいてもオッズ比が高くなることが実習後の母性意識の維持または高揚を示すと考えられるように，以下のように比較群を設定した．

実習前後での変化については，４群の中で，実習前の得点と比較し実習後の得点が２点以上上昇したものを「上昇群」，２点以下の下降があったものを「下降群」と更に群分けをして各群を比較した．この際肯定項目の上昇群は母性意識が高揚し，否定項目の上昇群は母性意識が低下すると解釈できる．また実習前後の得点差が−１から１点と変化しなかったものを「比較群」に含めた．「比較群」とは，各群において母性意識の変化をもたらさなかった群として考えた．肯定項目，否定項目それぞれにおいて，高得点群では下降群（−２点以下）と比較群（上昇群と変化のなかった群：−１点以上），低得点群では上昇群（２点以上）と比較群（下降群と変化のなかった群：１点以下）とで各実習体験項目について多重ロジスティック回帰分析を行った．

以上は，本学の前回調査報告[4]と同じ手続きをとった．

本研究における「母性理念質問紙」[6]のα係数は0.65〜0.7であり，内的整合性は比較的高いと言える．

分析は統計解析用ソフトSPSS 13.0 Jを用いた．

倫理的配慮として，対象者には調査の記載内容，および提出の有無は実習評価へは全く影響しないことを口頭にて説明し，回収をもって本研究に同意し，協力を得られたものとした．

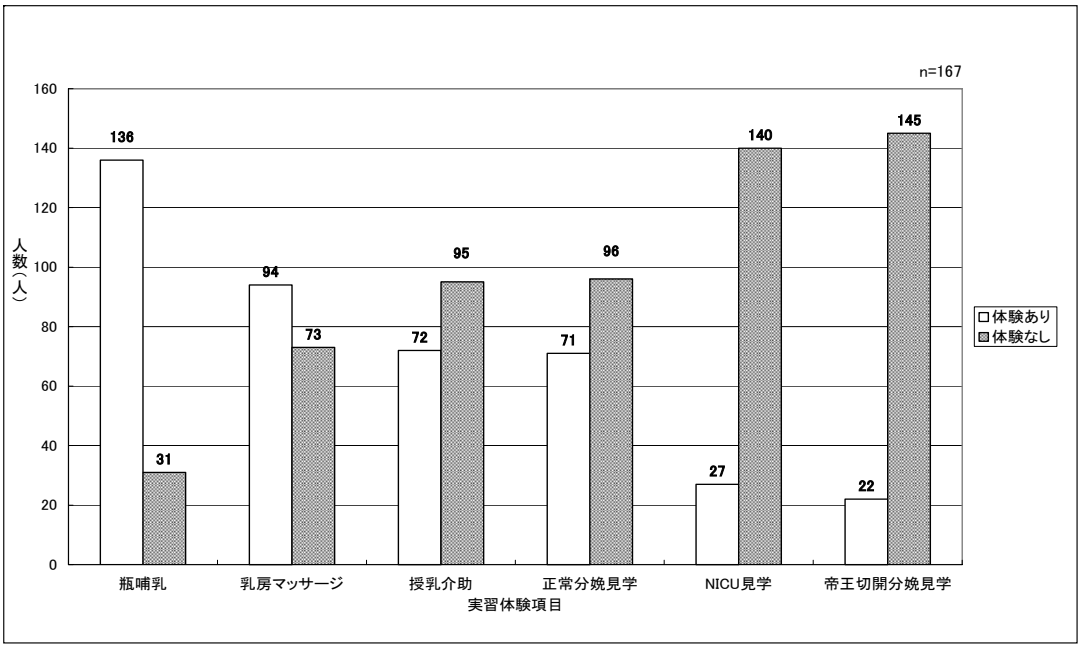

図1．学生が体験した実習項目

表．1　母性意識（肯定項目：18項目）設問別得点の実習前後の変化　n=167

肯定項目	実習前 M	実習前 SD	実習後 M	実習後 SD	
1. 妊娠は，女にとってすばらしい出来事である．	1.50	0.63	1.73	0.55	***
2. 赤ちゃんを産むことができるのは，女の特権である．	1.44	0.62	1.53	0.70	
4. 赤ちゃんを産んではじめて，子どもの可愛らしさがわかる．	-0.30	1.04	-0.53	1.22	**
5. 赤ちゃんを無事に産むためなら，どんな苦しみも我慢できる．	0.56	0.74	0.83	0.97	***
7. 女は子どもを産むことで，自分が生きた証拠を残すことができる．	0.19	0.94	0.21	1.09	
8. どんなことをしても，赤ちゃんは母乳で育てるべきである．	-0.07	0.88	0.01	0.94	
10. 子どもを産んで育てるのは，社会に対する女性のつとめである．	-0.34	0.92	-0.28	0.96	
11. 女は子どもを持つことで，人生の価値を知ることができる．	0.19	0.91	0.23	1.14	
13. 育児は女に向いている仕事であるから，するのが自然である．	-0.16	0.92	-0.12	1.03	
14. 子どもを産んで育てることは，自分の成長につながる．	1.48	0.57	1.59	0.64	*
16. 子どもを産んで育てなければ，女に生まれた甲斐がない．	-0.71	0.88	-0.51	1.05	**
17. 子どもがいることで，家庭生活はより楽しくなる．	1.25	0.65	1.47	0.66	***
19. わが子の成長を見届けるために，長生きしなければならない．	0.75	0.80	0.97	0.81	***
20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然のことである．	0.56	0.92	0.90	0.99	***
22. わが子のためなら，自分を犠牲にすることができる．	0.58	0.78	0.83	0.83	***
23. 子どもを育てるのは，産みの母が最良である．	0.68	0.91	0.78	0.92	
25. わが子の存在を感じるだけで，毎日の生活に張りがでる．	0.87	0.70	1.23	0.63	***
26. 育児に専念したいというのが，女の本音である．	-0.07	0.80	0.21	0.92	***
全体	8.40	6.74	11.09	8.52	***

*p<.05　**p<.01　***p<.001　（質問項目の出典：花沢成一，母性心理学，医学書院，1992.）

表．2　母性意識（否定項目：9項目）設問別得点の実習前後の変化　n=167

否定項目	実習前 M	実習前 SD	実習後 M	実習後 SD	
3. 妊娠した自分の姿は，想像しただけでみじめである．	-1.27	0.67	-1.37	0.77	
6. 女だけが妊娠やお産の苦労をするのは，不公平である．	-0.30	0.91	-0.62	1.01	***
9. 予定していない妊娠の場合は，人工中絶もやむを得ない．	-0.07	0.77	-0.16	0.83	
12. 結婚生活を楽しむためには，子どもをつくらないほうがよい．	-0.96	0.74	-1.04	0.85	
15. わが子を他人に預けてでも，自分の仕事は続けるべきである．	-0.40	0.69	-0.31	0.68	
18. 育児は妻だけでなく，夫も分担すべきである．	1.54	0.55	1.70	0.50	***
21. 育児に追われていると，若さが早く失われる．	0.04	0.99	-0.34	0.95	***
24. 育児から開放される時に，人間らしい自由な生活ができる．	-0.66	0.73	-0.74	0.77	
27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている．	-0.71	0.89	-0.82	0.94	
全体	-2.79	3.23	-3.69	3.70	***

*p<.05　**p<.01　***p<.001　（質問項目の出典：花沢成一，母性心理学，医学書院，1992.）

表．3　母性意識に影響する実習体験のオッズ比

群	n	正常分娩見学	帝王切開見学	NICU 見学	乳房マッサージ	授乳介助	瓶哺乳
肯定項目※							
高得点群	88	0.90	1.54	1.03	0.67	0.60	1.18
（比較群/下降群）#							
低得点群	79	1.08	0.57	1.85	1.01	0.86	0.66
（上昇群/比較群）§							
否定項目※※							
高得点群	77	0.79	0.55	1.26	1.07	1.90	0.34
（下降群/比較群）#							
低得点群	90	1.48	6.31*	1.10	0.74	2.27	2.99
（比較群/上昇群）§							

*p<0.05
※　：肯定項目の高得点群は実習前の平均点（9点）以上，低得点群は平均点（8点）以下の群別
※※：否定項目の高得点群は実習前の平均点（-2点）以上，低得点群は平均点（-3点）以下の群別
#　：肯定項目，否定項目の高得点群での比較群は実習後の得点が-1点以上の群，下降群は-2点以下の群
§　：肯定項目，否定項目の低得点群での上昇群は実習後の得点が2点以上の群，比較群は1点以下の群

結　果

1．対象者について

本調査における「母性理念質問用紙」[6]の回収数は214名（96.4%）であり，うち有効回答数167名（78.0%）であった．

対象学生が実習中に体験した項目を図．1に示す．

また実習中に新生児のバイタルサイン測定，沐浴，オムツ交換はほぼ全例に近い学生が体験していた．

2．母性意識の変化

実習前後の母性意識の変化を表.1および表.2に示す．

2001年～2004年における肯定得点の得点範囲は−17～31点，否定項目の得点範囲は−14～12点であった．

実習前の肯定項目の最低点は−13点，最高点は23点，平均点は8.4点（SD6.7），否定項目の最低点は−13点，最高点は7点，平均点は−2.8点（SD3.2）であった．

実習後の肯定項目の最低点は−17点，最高点は31点，平均点11.1点（SD8.5）であり，否定項目の最低点は−14点，最高点は12点，平均点−3.7点（SD3.7）であった．

実習前後の母性意識得点の変化は，実習後に実習前と比較し，表．1に示す通り肯定項目は有意に上昇が見られ（$p<0.001$），表．2に示すように否定項目は有意に下降しており（$p<0.001$），母性意識は実習後に有意に高くなっていた．

肯定項目において，実習後に得点の上昇したもの（2点以上の上昇）は，101人（60.5%），変化のなかったもの（−1～1点）は31人（18.6%），下降したもの（2点以上の下降）は35人（21.0%）であった．否定項目においては，得点上昇者は32人（19.2%），変化のないものは61人（36.5%），得点下降者は74人（44.3%）であった．そのうち肯定項目得点が下降し，なおかつ否定項目得点も上昇したものは7人（4.2%）であった．

母性意識の設問別にみた実習前後での変化においては，表．1に示す通り，肯定項目では18項目中10項目に有意に得点の上昇を認め（$p<0.05$～0.001），10項目で母性意識が有意に上昇したと言える．否定項目では，表．2に示すように9項目中2項目に有意に得点の下降を認め（$p<0.05$～0.001），否定項目中2項目において母性意識が有意に上昇したと言える．

3．実習体験項目毎の母性意識の変化

実習前と比較して，実習後母性意識得点が上昇または，下降にどのような実習体験が影響を与えるかを分析した（表.3）．

肯定項目においては，高得点群，低得点群ともに，各体験項目との間に有意な関与は認められなかった．

否定項目の低得点群において，帝王切開分娩見学のオッズ比は6.31（$p<0.05$）であり，母性意識に帝王切開分娩見学が有意に影響を与えるという結果であった．その他項目においては有意な関与はみられなかった．

否定項目高得点群においては，有意な関与を認めた項目はなかった．

考　察

1．母性意識の変化について

母性意識においては，実習前と比較し実習後に有意に高まっており，これは坂梨ら[7]をはじめとし数々の先行研究と一致する結果であった．

また本学における前回調査と同様の結果となった[4]．

このことから本学における母性看護実習は，母性意識の高揚に有効であったと言える．前回調査と同様の結果であったことから，4年が経過し学生を取り巻く環境や実習環境に変化が見られている中においても，母性看護実習の母性意識高揚に果たす役割は同様に得られていると言える．

本調査では，表.3に示すように否定項目低得点群における帝王切開分娩見学以外の各実習体験項目において，そのひとつひとつは母性意識に有意な影響を与えているわけではないとの結果が得られた．このことから，母性看護実習全体として実習そのものが母性意識の高揚に有効であったと言える．坂梨ら[7]は調査の中で，学生は実習を通して，母親の育児行動を見たり，学生自身が新

生児の看護において母親行動の体験をしたことが母性意識の変化の誘因になったのではないかと述べている．実習全体を通して，母と子の関わり，愛着形成の過程を見学すること，学習することを大切にしていくことが，学生の母性意識の高揚には有効であるという事が言えると考える．

しかし，結果に示すように肯定項目得点が下降し，否定項目得点も上昇したケースは7名（4.2%）であった．坂梨らの調査では，肯定項目得点下降かつ否定項目得点上昇したケースが92名中8名（8.7%）であった[7]．本研究では4.2%と坂梨ら[7]の調査と比較し，約半数という結果ではあったものの，少数ではあるが肯定項目得点，否定項目得点ともに実習後に母性意識低下を示す結果へ変化したケースが存在している．竹ノ上ら[8]が「この時期の看護学生の母性性の意識構造が，単純な一面的な発達をするものではなく，多くの発達的側面を持っている」と述べているように，看護学生の母性性の変化は複雑な発達過程をたどると考えられる．そのような発達過程にある学生において，母性看護実習が全ての学生に対して母性意識高揚に働くわけではないということが理解できる．

2．帝王切開分娩見学と母性意識について

実習体験項目の母性意識に与える影響については，結果に示す通り，否定項目低得点群での帝王切開分娩見学がオッズ比6.31で母性意識得点の低下に有意に影響を与えていることが示された．つまり実習前に母性意識の否定項目得点が平均より低い群において，帝王切開分娩見学を行うことで実習後の否定項目得点が有意に低下するという結果であった．

否定項目は母性意識を否定する項目であり，この得点が低いということは，すなわち母性意識を肯定していると言える．否定項目が平均点以下の群とは，母性意識を否定項目において肯定している群と言える．母性意識を肯定するということは，母性意識が高いと言えると考える．また実習前に比較し実習後に否定項目得点が低下するということは，実習後に母性意識をより肯定するようになったことを示している．今回の結果は，否定項目においてのみではあるが，実習前に母性意識が平均より高い群に対して帝王切開分娩見学を行うことで，更に母性意識を肯定するようになった，つまり母性意識を維持・上昇させたことを示していたと考えられる．

このことは，前回調査の結果を受け実習方法を変更したことが大きく影響していると考えられる．実習方法の変更後，受持ち妊婦のみの帝王切開分娩見学としたことで，対象妊婦の身体の変化だけではなく，帝王切開分娩に向けての心理的変化や分娩後の変化，母子の愛着形成の様子を観察することができている．また帝王切開分娩に至る妊婦は，何らかの医学的適応があって帝王切開分娩を選択するが，学生が妊娠中から受持ちをすることで，妊婦の持つ疾患や置かれている状況を学習し，理解し，対象妊婦と信頼関係を築いた上で帝王切開分娩見学を行うことができたと考えられる．前原[9]が「思春期・青年期に，身近な人の母性行動を観察したり，乳幼児と接触する体験をすると，母性意識の発達が促進される」と述べるように，妊婦と信頼関係を築いた上での見学は，学生自身が帝王切開分娩を「自分の身近な人の出産」として捉えやすい状況を作り上げ，そのことが母性意識に影響を与えた結果となったと考えられる．対象産婦との信頼関係の形成が，帝王切開分娩見学において母性意識を維持・高揚させる上では重要であると考えられる．

帝王切開分娩は，手術室という特殊な環境において行われるため，ほとんど手術室に入室経験のない学生にとっては，その環境下に置かれるだけでも緊張を感じ，適応するだけでも大変なストレスを感じる場合もあると考える．また，開腹手術という特殊性から，場合によっては生命誕生の場面として捉えにくいという一面も考えられる．対象学生は，成人看護実習において手術室実習も体験しているが，母性看護実習と手術室実習の実習時期の前後関係は決まっておらず，学生によってランダムに組まれている状態である．そのため帝王切開分娩の見学実習で初めて手術室に入室するという学生も多数存在している．

この様な状況下において，学生自身が心身，学習面全てにおいて十分に準備した上で，動機付けを持って帝王切開手術に臨む，加えてそれは信頼関係を築いた産婦の出産であるということは大き

な意味を持つと考える．これらのことが手術室という特殊な環境における分娩を「開腹手術」という観点より「生命の誕生の場面」として捉えることを助け，受持ち妊婦の分娩方法として，帝王切開分娩を肯定的に捉える事を助けていると考えられる．さらには妊娠後期からの関わりが，「命をはぐくむ母性」としての理解を助けたのではないかと考える．その結果として否定項目の低得点群において母性意識の上昇に働いたのではないかと考えられる．

加えて否定項目低得点群は，もともと母性意識が平均より高い群であり，妊娠や出産，育児に対して肯定的な思考を持っていることも，帝王切開分娩を受容し，生命の誕生として理解する事を助け，その結果として分娩に関わる事が母性意識をより高める方向に働いたとも考えられる．

杉田ら[10]は，母性看護実習と母性意識変化の関連性をみた調査の中で，新生児に対するケア回数と母性意識変化には関連がみられなかったと報告しており，これをもとに杉田[11]は「ケア経験の多さより，実習病院のケアの取り組みが巻き起こす母子関係に触れることの方が，影響力は大きいと考えられる」と述べている．このことからも，母性看護実習を母性意識との関係性で考えた場合，重要なのはケアや見学経験の有無や回数の多さではなく，その実習体験の中で母子の関係性や母親行動に触れる体験が大切であると言える．今回の調査において，否定項目低得点群のみではあるが帝王切開分娩見学を受持ち制としたことで母性意識の維持・高揚に影響を与えたという結果が示されたことからも，帝王切開分娩見学においても，見学希望者全員にそのまま学生の十分な準備無く見学を行うのではなく，母子関係を十分に観察し，理解できる環境を提供した上で見学をすすめていくことが重要と考える．

以上のことから，産婦と信頼関係を築いた上で，かつ学生自身も高い動機付けをもって，十分に準備を整えた上で臨む見学が母性意識高揚には有効であると言える．すなわち，実習体験の場のみを提供するのではなく，対象妊産褥婦との関係性の成立を基盤に置き，学習環境を整えた上での実習体験を提供することが重要であると考える．この結果を通じて，母性看護実習にとどまらず関係性の成立を看護の基本とすることの重要性を改めて認識できた．

今回帝王切開分娩見学の方法を変更したことは，否定項目の低得点群においてのみではあるが，母性意識の維持・高揚に有効であったと言える．今回の調査結果から，今後の実習においても引き続き，受持ち産婦の帝王切開分娩見学は学習の機会として積極的に提供していく事が有効と言える．

図．１に示すように本調査での帝王切開分娩見学率は13.2%であり，前回調査での23.9%[4]と比較して見学率は減少している．しかしそれは上記理由により受持ちのみの見学としたためであり，現在実習病院では帝王切開分娩率が増えつつある．今後もハイリスク妊婦の増加が考えられ，それに伴い学生の受持ち産婦の帝王切開分娩見学の機会は更に増えていくことも考えられる．

ハイリスク妊婦が増加しつつある中において，今回，帝王切開分娩見学の母性意識維持・高揚についての結果が示されたことは，今後の学生指導の中での重要な資料となると考えられる．

本学では，帝王切開分娩見学以外の実習中の体験については結果に示す通りである.看護実践能力が問われる中にあって,また母性領域において実習体験の維持が難しいとされている現在において，今後も帝王切開分娩見学だけではなく現在の様々な実習体験を維持し，学生に様々な実習体験を提供することは，母性意識高揚においても必要なことであると言える.しかし，ただ実習体験を提供するだけではなく，対象妊産褥婦との関係性の成立に重点に置き，母子関係の観察等が十分に行える学習環境を整えた上で実習をすすめることが重要と考える．

結　語

１．母性看護実習全体を通して母性意識においては，実習前に比較し，肯定項目では実習後有意に得点の上昇が認められ，否定項目においては，有意に得点の下降が認められ，実習後母性意識は有意に高まった．

２．実習体験項目のなかでも帝王切開分娩見学に

ついては，否定項目の低得点群において有意に得点下降に影響しており，母性意識の維持・高揚に効果があることが分かった．

３．帝王切開分娩の見学を術前から母親の看護を実習した学生のみに限定する受持ちのみの見学に変更したことで，帝王切開分娩見学を母性意識の維持・高揚に有効な体験項目とすることが出来た．

謝　辞

本研究を行うにあたり，調査にご協力頂きました学生の皆様，ならびにご協力，ご助言頂きました金沢医科大学笹野京子先生に心から感謝いたします．

引用文献

１）財団法人母子衛生研究会：母子保健の主なる統計．母子保健事業団，東京，pp127，2006.

２）茆原弘光，澤倫太郎，米山芳雄，竹下俊行，大坪保雄，鈴木俊治：我が国における帝王切開率の変遷と適応の変化．周産期医学33：pp921-926，2003.

３）Appleton & Lange : Operative Obstetrics, Williams Obstetrics 21 th ed,Connecticut, pp538-545, 2003.

４）笹野京子，長谷川ともみ，堀井満恵，塚田トキヱ：母性看護実習における母性意識の変化．富山医科薬科大学看護学会誌４：pp41-51，2001.

５）永山くに子，長谷川ともみ，豊岡文恵，二川香里：母性看護学実習の実際―学生の内なる力を信じて-．看護展望29：pp944-949，2004.

６）花沢成一：母性意識の発達．母性心理学，花沢成一，pp9-60，医学書院，東京，1992.

７）坂梨薫，加藤千晶，小城原新，宮原忍：母性看護学実習が母性意識の発達変容に及ぼす影響―「女性に対する態度尺度」および「母性理念質問紙」の調査から-．母性衛生37：pp135-144，1996.

８）竹ノ上ケイ子，内海滉：看護学生の母性性の発達に関する研究(2)．日本看護研究学会雑誌15，pp9-19，1992.

９）前原邦江：母性性と女性性，「女性の看護学―母性の健康から女性の健康へ-」．吉沢豊予子，鈴木幸子編著，pp59-66，メヂカルフレンド社，2001.

10）杉田與志子，日比野妙子：母性看護実習と母性意識変化の関連性に対する一考察．福祉と人間科学5，pp41-45，2004.

11）杉田與志子：母性看護学実習における母性意識の変化，看護実践の科学28，pp81，2003.

Evaluation of educational efficacy of maternal nursing practice：　Student nurses' observation of cesarean birth and its significance

Fumie SHIMADA[1)], Tomomi HASEGAWA[2)], Yuri KITA[1)],
Kaori FUTAKAWA[2)], Kayoko NISHIMURA[2)], Kuniko NAGAYAMA[2)]

1) Former School of Nursing, University of Toyama
2) School of Nursing, University of Toyama

Abstract

Recently, the cesarean births are increasing in tendency. It is important to examine the meaning of witnessing cesarean birth when the student nurse does her maternity nursing practice. This research is to clarify an effective method regarding experiencing cesarean birth when the student nurse practices the maternity nursing. It also aimed to clarify the educational effect. The foregoing research did not indicate apparent changes in students' motherhood consideration after the training. This research, as a new trial, aimed to prove educational efficacy by selecting students to observe cesarean births: from all students who wished to participate to the students who are in charge of the delivering mothers.

The study's subjects included were 167of 222 student nurses who participated in maternity nursing practice from 2001 to 2004 at the school of nursing at Toyama University. The motherhood consideration was measured by using the motherhood idea questionnaire before and after the maternity nursing practice. The significance level was assumed to be 5% by using a multiple, logistic analysis as a statistical analysis. Cooperation in the research was voluntary, and the students were told that their participation will not affect their academic performance.

The results showed a considerable increase of motherhood consideration among the participants, particularly in the low score group of a negative item (the group which does not controvert motherhood consideration)　in the maternal idea questionnaire. In other crowds groups, a significant change was not admitted.

For this reason, this study suggests that observation training is more effective when restricted to the student nurses who take care of delivering mothers to promote their motherhood consideration. (264 words)

Key words

maternity nursing, educational effect, cesarean birth, motherhood consideration